

串浜陣屋跡コース

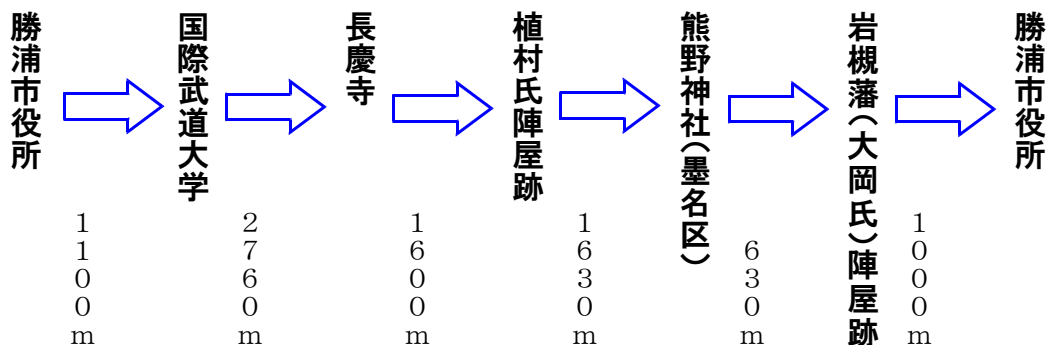
勝浦市内で最も古い建造物の一つで通称樫寺で知られる長慶寺、勝浦の領主であった植村氏2代泰勝が寛永年間の頃（推定）創建したとされる串浜陣屋跡などをめぐるコースです。

経路図



スタートとゴール地点は駐車場のある勝浦市役所です。

コースの経路(8.7km)



【経路説明】

①市役所に車を置き、市役所入口を左折、すぐに左折し市営野球場を左に見ながら進む。1kmを過ぎると、武道・体育を基盤とした国際的に活躍できる指導者の育成のため昭和59年(1984)に創設された②国際武道大学がある。

※入口正面には、大学創設者松前重義博士の銅像が大学正面に立っている。

その先600mで国道297号線にぶつかり右折する。下に国道128号線バイパスが通る③峰山橋を渡る。坂道をしばらく行くと左に海を望むことができる。また、海の近くの山には、出発地点の市役所がリゾートマンションとともに林立しているのを見ることができる。両側コンクリートの吹き付けを抜けると坂道は終わり平坦な道となる。しばらく歩くと左に生涯大学がある。その隣には、地元で採れた新鮮な野菜などが並ぶ直売所がある。200mほど行き、④双葉資材置場を右折する。細い道を直進すると正面に⑤長慶寺がある。

※創建は寛永7年(1630)市内でも最も古い建造物の一つであり、市指定有形文化財に指定されている。

きた道を戻り、⑥生涯大学の手前を右折する。細い道を道なりに進む。途中右側に水の溜まった洞穴がある。

※ここには6月頃になるとモリアオガエルの卵が観察できる。

その先テニスコートを左に進むと⑦串浜1号橋に出る。橋の中央から左側を見ると勝浦湾が望める。橋を渡りすぐに右折する。この左側一帯は、植村氏の陣屋(串浜陣屋)の跡地と言われている。先ほど通った串浜1号橋の下の道を下りしばらく進む。坂を下りきったところで丁字路にぶつかり左折する。道なりに行くと国道128号線と並行して走るJR外房線が上を通る小さな鉄橋が見える。この鉄橋の手前を左折しトンネルを潜りさらにその先右折する。工務店の事務所を左に見ると⑧熊野神社がある。

※この神社には、相殿貴船神社と一緒に祭られている。

JR外房線と並行して進むと、⑨勝浦駅が右に見え、駅の自由通路の階段を上り線路を横断し、南口駅前広場に出る。海中展望塔のモニュメントを右に見ながら進むと国道297号線とぶつかり右折する。左に⑩勝浦市こども館がある。

※このこども館付近は、宝暦元年(1751)に植村氏が改易となった後、岩槻藩大岡

氏が支配するようになり勝浦に陣屋が置かれ、その勝浦陣屋があった場所と言われている。

こども館の脇の歩道トンネルを抜けると国道128号線に出る。左折し塩田病院脇の路地を右折する。さらに病院裏へと左折し坂道を登る。途中休憩用の椅子もあるので疲れたら一休み。登り切ると日本武道館勝浦研修センターに出る。その先右折し①市役所に戻る。



コースの見所

① 国際武道大学

(財)日本武道館会長として武道を通じた国際交流を押し進めてきた松前重義博士が、武道・体育を基盤とした国際的に活躍できる指導者の育成のため1984年に創設した。体育学部の単科大学として1学部2学科制からスタートし、現在は1学部4学科制に改編している。日本固有の伝統文化である武道精神を理解し、国際的に活躍する武道指導者を育成する『武道学科』、アスリートや生涯スポーツなどの幅広い領域のスポーツ指導者を養成する『体育学科』、アスリートを支える人材、人々の健康づくりに寄与する人材を育成する『スポーツトレーナー学科』、国際的な視野を持ち、「スポーツで社会を豊かにする」人材を育成する『国際スポーツ文化学科』の4学科である。

② 長慶寺

長慶寺本堂 市指定有形文化財

もと真言宗であったが、暦応二年(1339年)日統によって、日蓮宗に改宗。通称、檜寺で知られる。市内で最も古い建造物。

創建は寛永七年(1630年)当時の勝浦城主植村土佐守泰勝より、紀州産うばめ檜の円柱三十六本が寄進され、これがこの建築の根幹となっている。現在は下部15cmほどは切り落とされ補われているが当初の美観をしのばせ見事である。

この建築は、何度も再建や修理が行われているが、この建築の基本というべき三十六本の大円柱は現存して、創建時をしのばすに足りるところから江戸初期の遺構として貴重である。



③ モリアオガエル

コースの途中の水の溜まった洞窟の上をよく見るとモリアオガエルのたまごがある。モリアオガエルは、下に池があるなど、水がある木にたまごを産む。地方によっては天然記念物に指定しているところもある。

本市では興津地区や串浜区などで生息している。

※ 和名 モリアオガエル

アオガエル科アオガエル属。体色は地域によって異なるが勝浦では緑色をしたものが見られる。森林に棲み、樹上生活を送る。

繁殖期は4月から7月頃である。

写真では、白いところがたまごで、孵化した幼生は水面へと落ちてゆく。



④ 植村氏陣屋跡・串浜

春日神社脇の細い急坂を登りつくした一帯の串浜平。植村帯刀の陣屋跡。

植村氏陣屋は、近世に植村氏が6代に渡って、勝浦地域の支配の拠点としていたものである。しかし、現在では、その形態はよく分からなくなってしまっている。国道297号線の「新田」というバス停の所から、南西に入っていく道があるが、これをどんどん進んでいくと、テニスコートの脇を通って、切り通しの道路の上を渡っていく。この渡って行った先の西側一帯が陣屋の伝承地であるらしい。図の中央にある民家の屋号が「御陣屋」であるという。

東側のテニスコートが「首切場」地名の残る部分である。現在は切り通しの道路によって切り離されているが、もともとはつながっていたのであろう。もしくは、もともと堀状の通路によって隔てられていたのかもしれない。

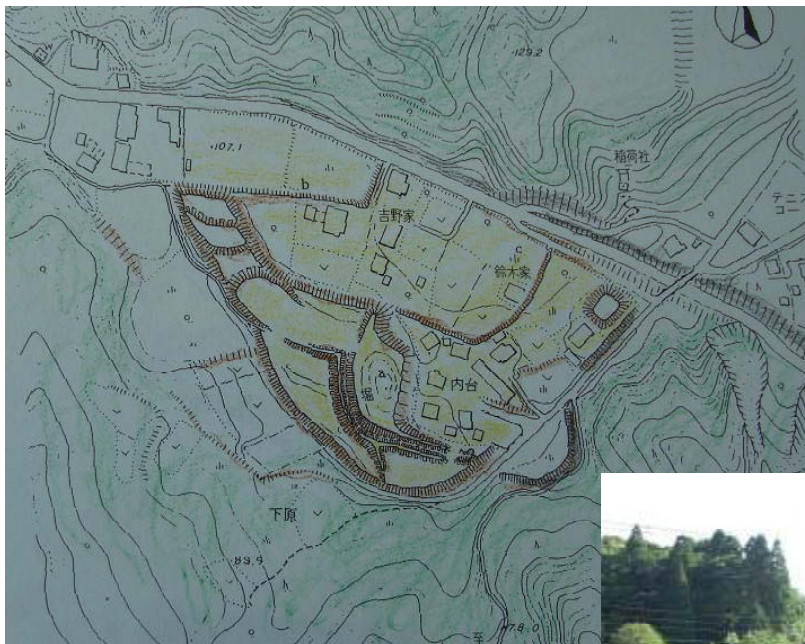
近世初期に入部した際、植村氏は最初、勝浦城に入ったといわれている。その後、串浜に陣屋を築いて移転したということであるが、大名でないため、勝浦城を維持することを遠慮したのであろうか。

『勝浦市史』では、陣屋創建を、植村氏2代泰勝が5000石から9000石に加増された寛永年間の頃と推定している。しかし、植村氏については史料が乏しく、詳細は分からないことが多い。

宝永元年（1751年）、6代植村恒朝は、分家の事件に連座して他家預かりとなり、植村氏は改易となった。以後、勝浦は大岡氏の支配下に置かれ、串浜の陣屋も廃されたと

いう。大岡氏の陣屋は墨名（とな）にあったという。

※ 串浜の東灘酒造から陣屋に行く道と陣屋から墨名の熊野神社へ抜ける道があった。



⑤ 墨名・熊野神社

熊野神社 相殿 貴船神社

祭神は熊野加武呂命・伊太祁曾命・高おかみの神

※ おかみ：雨冠の下に龍でその間に口3つ 龍の別名



熊野加武呂命 別の御名 伊弉冉尊

悉くに萬物を生み給う神にして国土経営に神功を建てられた本地垂迹説に依り、朝に現世安穩を祈り夕に來世を極樂を祈り中世仏教習合した為熊野大権現の呼名も高く熊野詣での信仰厚き神なり。伊太祁曾命 別の御名 五十猛命 素盞鳴尊の御子にして気性武く強く樹の種を国々に分布し植林せしめ有功の神で紀伊の国に

祀られ木の神、植林の神と尊信厚き神なり。

たかおかみの神 別の御名 貴船の神 木船の神

水事を主宰し農業を以て唯一としている我国の上代に於て雨を降らせ氷雨を止め祀中祈雨止雨に靈驗ある神水を司り五穀豊穰を祈願し木の森の神と豊漁の守護神と尊称せらる神なり。

ご創立

神武の御宇天富命勅命を奉じ四国の忌部（齋部）の裔を率いて東国沃壤の地を求め房総の地に至り麻穀を播植せしめ開拓民の地を定められ、漁に優れたる紀伊の忌部の裔を別に招き狩漁の術を授けしめ給う。

紀伊の忌部郷土の主護神熊野六神、木の種の神伊太祁曾の神の御分霊を奉遷し勝浦の地に移住。狩漁の業を奨励し主護神と尊び墨名の里に祀る熊野神社の御創立の始めなりと傳う。

貞観九年春部直黒生名の節婦ある時に熊野大神の御神徳を尊び祭祀奉幣をなすと見ゆ村上天皇の御宇里人新たに神祠を建て鎮守の神と尊崇す。

養和元年伊豆伊東の伊藤祐親の支族「伊藤祐範なる者」、源頼朝公を怨悪することあり難を避けこの地に来り。春部の家を主として貴船の神に武運弥栄を祈念し祀るを後、熊野の社に相殿として合祀す。

慶長年中元禄年中に海嘯あり、社殿倒潰するを後宝暦12年大岡出雲守忠光の所領となり社地免租とせらる。

明治4年御一心御改政に付社地上地す。同41年元上地の山林譲与せらる。昭和20年8月戦災により社殿炎上。御神宝を奉遷。難を避くも記録を消失せり。直ちに社殿を復興するが、後年昭和37年現社殿を建立す。 御事績（神社御由緒書きを掲載。）



⑥ 岩槻藩(大岡氏)陣屋跡

現在の勝浦市子ども館

ここにはかつて、岩槻藩(大岡氏)の勝浦役所(陣屋)が置かれていた。また、明治時代には旧大多喜警察署勝浦分署があり、その跡地でもある。

岩槻藩

岩槻藩は勝浦に陣屋を設け、前原（鴨川市）に役所、奥山（大多喜町）に番所を設置した。房総領の支配の拠点は勝浦役所（陣屋は勝浦役所と呼ばれた。）で、そこには郡奉行1名、代官2名、同心若干名が勤務した。大岡氏の陣屋は墨名村に置かれた。 ※「大日本國誌」

この勝浦役所は現在の「子ども館」あたりであった。

※ 旧大多喜警察署勝浦分署跡地である。

勝浦藩(岩槻藩)主『大岡忠光』略歴

享保 9年(1724年) 8月26日	西丸(徳川家重)小姓となる。300俵扶持。
享保12年(1727年) 12月18日	従五位下出雲守に叙任。
享保18年(1733年) 11月	石高500石加増。
延享 2年(1745年) 9月 1日	小姓頭取より小姓組番頭格式奥勤兼帯御側御用取次見習に異動。知行石高800石。
延享 3年(1746年) 10月25日	御側御用取次側衆に異動し、石高1200石加増。
寛延 元年(1748年) 12月	石高3000石加増。
宝暦 元年(1751年)	上総国勝浦の領主となり、石高9700石となる。
宝暦 4年(1754年) 3月 1日	若年寄に異動し、奥勤を兼帯。石高5000石加増。
宝暦 6年(1756年) 5月21日	側用人に異動し、石高5000石加増し、武蔵国岩槻藩主となる。従四位下に昇叙。
宝暦10年(1760年) 4月26日	卒去。法名：得祥院義山天忠大居士。

墓所：埼玉県さいたま市岩槻区日の出町の玉峰山龍門寺。

植村氏から大岡氏へ

天和2年(1682年)4月21日、上総・安房・近江・丹波などを所領していた植村忠朝は、新たに2000石を加増されて1万1000石を領する大名として、諸侯に列したことから勝浦藩が立藩した。植村氏は本多忠勝の寄子で、里見氏の牽制などで功績を挙げた譜代大名である。

元禄10年(1696年)2月、忠朝の後を植村正朝が継ぐ。こと時、正朝は弟の植村忠元に1000石を分与している。

正朝の後は植村恒朝が継いだ。しかし寛延4年(1751年)8月24日、分家の植村千吉が朝比奈義豊に殺害されるという事件が起こった。この事件の連座により、恒朝は所領を没収されて改易となり、本家の大和国高取藩主植村家道預かりとなった。但し、名跡のみ養嗣子の植村寿朝が継ぐことを許された。

代わって勝浦には宝暦元年(1751年)12月、徳川家重の側近として活躍した大岡忠光が入った(5000石加増で1万石の大名となって)。忠光は宝暦4年(1754年)3月に若年寄に栄進したことから5000石を加増。

宝暦6年(1756年)5月に側用人に栄進。5000石加増で合計2万石で武蔵国岩槻藩に加増移封となり、勝浦藩は廃藩となった。

その後岩槻藩は墨名村に勝浦役所(陣屋)を置き、明治維新まで、房総領支配の拠点としたのである。

※忠光は著名な大岡越前こと大岡忠相の一族である。